

秋期福音特別集会 (3) (京都)

本願体現

――イザヤ書第34章～35章――

1983年11月6日

小池辰雄

地獄と天国 一剣天によりて寒し 死して成れ イザヤ書は小聖書 沙漠はサフランの如く
天国的な美しい姿 イエスは天国体の中心 落ち穂拾い キリストに直結の民 万路一道 死
人となりてなりはてて

【イザヤ34】

1 もろもろの国よちかづきてきけ、もろもろの民よ耳をかたぶけよ。地と
地にみつるもの世界とせかいより出るすべての者きけ。2 エホバはよろずの
国にむかいて怒り、そのよろずの軍にむかいて忿怒り、かれらをことごとく
滅し、かれらを屠らしめたもう。3 かれらは殺されて抛げ棄てられ、その屍
の臭気たちのぼり、山はその血にて融されん。4 天の万象はきえうせ、もろ
もろの天は書巻のごとくにまかれん。その万象のおつるは葡萄の葉のおつる
がごとく、無花果のかれたる葉のおつるが如くならん。5 わが剣は天にてう
るおいたり。視よエドムの上にくだり、滅亡に定めたる民のうえにくだりて
之をさばかん。6 エホバの剣は血にてみち脂にてこえ、小羊と山羊との血、
牡羊の腎のあぶらにて肥ゆ。エホバはボズラにて牲のけものをころし、エド
ムの地にて大いにほふることをなし給えり。7 その屠場には野牛、こやし、
牡牛もともに下る。そのくには血にてうるおされ、その塵はあぶらにて肥さ
るべし。

8 こはエホバの仇をかえしたもう日にして、シオンの訟えのために報いを
なしたもう年なり。9 エドムのもろもろの河はかわりて樹脂となり、その塵
はかわりて硫黄となり。その土はかわりてもゆる樹脂となり、10 昼も夜もき
えずその烟つくる期なく上騰らん。かくて世々あれすたれ、永遠までもその
所をすぐる者なかるべし。11 鵜と刺鼠とそこを己がものとなし、鷺と鴉とそ
こにすまん。エホバそのうえに乱れをおこす縄をはり、空虚をきたらする錘
をさげ給うべし。12 国をつぐべき者をたてんとて貴者ふたたび呼び集むるこ
とをせじ。もろもろの諸侯はみな失せてなくなるべし。13 その殿にはことごと
くとく荊はえ、城にはことごとく刺草と薊とはえ、野犬のすみか駝鳥の場とな



らん。¹⁴野のけものと豺狼とここにあい、牡山羊その友をよび、梟もまた宿りてここを安所とせん。¹⁵蛇ここに穴をつくり卵をうみてこれを孚し、おのれの影の下に子をあつむ。鳶もまたその偶とともに此処にあつまらん。

¹⁶なんじらエホバの書をつまびらかにたずねて読むべし。これらのもの一つも欠くることなく又ひとつもその偶をかくものあらじ。そはエホバの口このことを命じ、その霊これらを集めたもうべければなり。¹⁷エホバこれらのものに籤をひかせ手づから縄をもて量り、この地をわけあたえて永くかれらに保たしめ、世々にいたるまでここに住ましめたまわん。

【イザヤ35】

¹荒野とうるおいなき地とはたのしみ、沙漠はよろこびて番紅の花のごとくに咲きかがやかん。²盛んに咲きかがやきてよろこび且よろこび且うたい、レバノンの栄をえ、カルメルおよびシヤロンの美しきを得ん。かれらはエホバのさかえを見、われらの神のうるわしきを見るべし。

³なんじら萎たる手をつよくし、弱りたる膝をすこやかにせよ。⁴心さわがしきものに対していえ、なんじら雄々しかれ懼るるなかれ、なんじらの神をみよ、刑罰きたり神の報いきたらん、神きたりてなんじらを救いたもうべし。

⁵そのとき聾者の目はひらけ、聾者の耳はあくことを得べし。⁶そのとき跛者は鹿の如くにとびはしり、聾者の舌はうたうたわん。そは荒野に水わきいで、沙漠に川ながるべければなり。⁷やけたる沙は池となり、うるおいなき地はみずの源となり、野犬のふしたるすみかは蘆葦のしげりあう所となるべし。⁸かしこに大路あり。そのみちは聖道となえられん。穢れたるものはこれを過ぐることにあらず。ただ主の民のために備えらる。これを歩むものはおろかなりとも迷うことなし。⁹かしこに獅おらず、あらしき獣もその路にのぼることなし。然ばそこにて之にあう事なかるべし。ただ贖われたる者のみそこを歩まん。¹⁰エホバに贖いすくわれし者うたうたいつつ帰りてシオンにきたり、その首にとこしえの歡喜をいただき、樂しみとよろこびとをえん。而して悲哀となげきとは逃げさるべし。

●地獄と天国

今日はイザヤ書の34章と35章です。地獄と天国とまあいうわけです。34章は、最初は世界的審判ですね。

¹もろもろの国よちかづきてきけ、もろもろの民よ耳をかたぶけよ。地と地にみつるもの世界とせかいより出るすべての者きけ。と。要するに、全世界に向かつての素晴らしい呼びかけです。



キリスト教国でも、聖書は柵の上の本にしているわけですよ。あるいは、教会の柵に積んである。教会に手ぶらで行って、聖書と讃美歌を借りて、お説教を聞いて、またそこに戻して、帰ってくる。それが大方の姿です。

「聖書はからだの一部分である」

なんていう、そんな意識は全然ない。マルチン・ルターが、聖書は炉辺の書としていろいろ端で読む本だと言った。そのルターの宗教改革の精神も、生誕五百年を迎えても、あいかわず本当の意味では迎えているわけではない。

我々は選びの民です。遺れる民、あるいは選ばれたる民。これはキリストの恵みのゆえに、その自覚は、どうぞはつきり持っていたきたい。

2 エホバはよろずの国にむかいて怒り、そのよろずの軍にむかいて忿怒^{いきどお}り、かれらをことごとく滅し、かれらを屠^{ほふ}らしめたもう。

そんなお互いに屠るようなことが——ドイツ語の「戦う」という字は「屠る」という字ですが——起きらないともかぎらない。とにかく、爆弾を爆発させて要人を何十人も殺したり、あいかわらず、イスラエルやシリアのあの辺はゴタゴタしている。あそこはやはり世界の問題の焦点になるね。だから、

「ユダヤ人が本当に悔い改めたら、最後の救いがくる」

と、パウロが預言しているとおりです。超一流以上の人物、キリストが現れたのに、これを今でもユダヤ人は認めないのだからね、預言者の一人くらいにしか思わない。

聖書の中に読み入ると、本当に炎のようになる。あるいは、真清水のごとくに澄んでしまう。

3 かれらは殺されて抛^なげ棄てられ、その屍^{かばね}の臭気^{くさきか}たちのぼり、山はその血に融^とかれん。4 天の万象はきえうせ、もろもろの天は書卷^{まきもの}のごとくにまかれん。

その万象のおつるは葡萄の葉のおつるのごとく、無花果のかれたる葉のおつるが如くならん。

これは黙示録の6章に同じようなことが書いてあります。この34章の1節から4節は大変な言葉です。ペテロ書にもありますね、このように崩れてしまうという。

ペテロ後書3章8節、

「⁸愛する者よ、なんじら此の一事を忘るな。主の御前には一日は千年のごとく、千年は一日のごとし。⁹主その約束を果すに遅きは、或人の遅しと思うが如きにあらず、ただ一人の亡ぶるをも望み給わず、凡て^{すべ}の人の悔改^{くいあらため}に至らんことを望みて汝らを永く忍び給うなり。

素晴らしい言葉です。内村先生のあの戦場ヶ原の祈りの気持ちもここにある。

「凡て^{すべ}の人の悔改^{くいあらため}に至らんことを」

という、万人救済です。

10 されど主の日は盗人^{ぬすびと}のごとく来らん、その日には天とどろきて去り、もろ



もろの天体は焼け崩れ、地とそこの中にある工とは焼け尽きん。¹¹かく此等のものはみな崩るべければ、汝等いかに潔き行状と敬虔とをもて、¹²神の日の来るを待ち、之を速やかにせんことを勉むべきにあらずや、その日には天燃え崩れ、もろもろの天体焼け溶けん。¹³されど我らは神の約束によりて、義の住むところの新しき天と新しき地とを待つ。」(ペテロ後3:8～13)

キリストご自身がこの終末のところをマルコ伝13章で預言されておられます。

そういうことで、世界はだんだん善くはならない。だんだん悪くなる。ゲーテもそのことを「エッカーマンとの対話」の中で言っている。預言者はみなやはり、使徒たちと同じように終末を意識して、神の最後の審判とその後にくる救いとを望んでいる。そういうところは、旧・新約は一貫しているんです。マルコ伝13章7節、

「⁷戦争と戦争の噂とを聞くととき懼るな、かかる事はあるべきなり、されど未だ終りにはあらず。⁸即ち「民は民に、国は国に逆いて起たん」また処々に地震あり、飢饉あらん、これらは産みの苦難の始めなり。……¹³又なんじら我が名の故に凡ての人に憎まれん、されど終りまで耐え忍ぶ者は救わるべし。

……

偽キリストが現れるから気をつけろと書いてある。

²⁴其の時、その患難ののち、日は暗く、月は光を発たず。²⁵星は空より隕ち、天にある万象ふるい動かん。²⁶其のとき人々、人の子の大いなる能力と栄光とをもて、雲に乗り来るを見ん。²⁷その時かれは使者たちを遣して、地の極より天の極まで、四方より其の選民をあつめん。……

「しつかり目を覚ましていろ」と、あとの方に書いてある。

³¹天地は過ぎゆかん、されど我が言は過ぎ逝くことなし。」(マルコ13:7～31)

そういう、いよいよファイナル、カラストロフのところに来ました。⁵節、

⁵わが剣は天にてうるおいたり。視よエドムの上にくだり、滅亡に定めたる民のうえにくだりて之をさばかん。

と、恐ろしいことが書いてある。これは神さまの天剣です。

●一剣天によりて寒し

それで、ひとつ不思議な言葉がある。やはり、坊さんの言葉で非常に著しいのがある。明極楚俊禅師という。これは中国の坊さんだな。

「楚俊禅師曰く、両頭俱に截断せば一剣天に倚りて寒し(寒し)。」

という。「両頭」、二つの頭というのは、生と死のことを言う。生きるの、死ぬのと。生と死の、その二つの頭。人間にはすぐこの生死のことが問題になる。

「その生死を、どちらも断つてしまえ。生きるも死ぬもないんだ。相対的な生きる



死ぬではないぞ」

ということなんです。そうすると、それを本当に断つと――これは霊的な剣です――

「二剣天によりて寒し」

というのは、天にあつてこの両頭を切る閃きが、「寒し」というのは煌々たることです。

それは、楠木正成くすのきまささしげが湊川の戦いで破れて、いよいよ自刃しようというときに、弟の正季まなつえが、「七生報国」

を誓つて、互いに刺しちがえるときに、この句を唱えたということです。これは広嚴寺の明極楚俊という禅師に聞いた言葉なんです。そのときに、その坊さんがこの言葉を言つてくれて、それで正成はそれを告げて潔く自刃したという。お互いに刺して倒れた。何度生まれ変わつてきても、天皇のために尽くすという忠臣――

「嗚呼忠臣楠氏之墓」
ああ

というのがある――いわゆる相対的な生死を乗り越えた世界。それは本当に今度は甦りを持つわけです。

●死して成れ

ゲーテの詩の中にこういうのがある。その中の一節ですが、「ゼーリゲ・ゼーエンズフト」「恵まれたる憧憬」という詩です。「ゼーリッヒ」というのは、

「幸いなるかな、貧しき者。天国はその人のものなり」

というあの「幸いなるかな」はみんなこの

「ゼーリッヒ」「恵まれたるかな」

という字です。だから、

「恵福」

と訳した方がいい。聖書の中に、いわゆる「幸せ」という「幸福」グリュックという字はほとんど出てこない。聖書はこちらの「ゼーリッヒ」「恵福」という字が出ている。

「死して成れ」という言葉を汝が心に持たないかぎり、汝はこの暗い世界におけるところの曇った旅人にすぎない。」

と。

「死して成れ」(シュティルプ・ウント・ヴェルデ)

という言葉をしつかりと心の中で持たないかぎり、これを体験しないかぎり、いつまでたつてもダメだということ。

「キリスト教を信じている」

とかなんとか言つても、本当に「死して成れ」という、

「キリストの十字架で死んで復活の生命で聖霊に生きていなければダメだ」

というんです、私たちの福音の角度から言うならば。



「死んだ、生きた」

なんていう、ただ相対的なことではないと。

パウロはダマスコ途上で霊撃されて、もう平伏してしまったでしょ。キリストが現れたんだ、

「われ立たん」

と言って。それで、やつつけられて、パウロはひっくり返された。あれがまさに、死して成ったんです、パウロは。それから、凄いことになった。ルターでもそうです。みんなそう。

「人新たに生まれずば、天国には入れない」

とキリストに言われたのもそれです。

「死して成らざれば入らず」

ということ。

普通の教養の世界では――教養はもちろん結構なことで、大事なことですけれども――ただ教養の世界でだんだん自己を完成していくなんていう、そんなものではないということ。それはそれであるところまでいい。しかし、あるところで行き詰まります。そこでガラッと転換をしないとね。

要するに、天剣が閃いて、

「いわゆる相対的な生死ではないぞ」

と。本当に霊的な角度でもって自分に死んで殺された、それは十字架において。

「われキリストと共に十字架せられたり」

とパウロが告白したのがこれです。両頭を断った世界です。

「もはやわれ生くるにあらず、キリストわがうちにありて生き給うなり」

「御霊のキリストが私の中で生きてくださっていて、もういい。自分はあいかわらずダメな面があるうと、そんなことは問題じゃないぞ」

と言って進んで行く。

皆さん、いつも前を向いて行ってくださいよ。自分を見ることも、人を見ることもないです。前を向いて行く。そうすると、本当に今度は、人を助ける人になる。そこが今日の最後の

「本願体現」

のところ。本願に圧倒されて、それから本願体現になる。回帰し、圧倒されなければ、この体現にはこない。

●イザヤ書は小聖書

このイザヤ書は1章から66章まで大変なものだ。旧約聖書で一卷を選べと言われたら、私は文句なしにイザヤ書を選びます。ルターは、



「詩篇が小聖書だ」

と言ったが、私は、

「イザヤ書が小聖書だ」

と言いたい。もつと重厚な内容を持ったドラマですからね、イザヤ書は。詩篇は叙情的な世界では素晴らしい。ここにあらゆるものが出てますから、その点はもちろんそうなんですけれども。それを全部受けとって素晴らしいことにしたのがキリストなので、そのキリストから溢れてきたものを手紙に書いたりなんかしたのが新約聖書ですからね。何といっても、キリストはガリラヤ湖であつて、そこに注いできた水が全部また流れ出ていくということ。

5 わが剣は天にてうるおいたり。視よエドムの上にくんだり、滅亡に定めたる民のうえにくだりて之をさばかん。6 エホバの剣は血にてみち脂にてこえ、小羊と山羊との血、牡羊の腎のあぶらにて肥ゆ。

なんて、ちよつと我々には読みにくいようなところです。これは砂漠の民族にはすぐこういうのは分かるのだろうけれども。

エホバはボズラにて牲のけものをころし、エドムの地にて大いにほふことをなし給えり。

これは殺戮ですね。エドムというのはイスラエルの敵だから。審判を一番まともに、まっこうに受けるところなんだ。

7 その屠場には野牛、こうし、牡牛もともに下る。そのくには血にてうるおされ、その塵はあぶらにて肥さるべし。

8 こはエホバの仇をかえしたもう日にして、シオンの訟えのために報いをなしたもう年なり。9 エドムのもろもろの河はかわりて樹脂となり、その塵はかわりて硫黄となり。その土はかわりてもゆる樹脂となり、10 昼も夜もきえずその烟つくる期なく上騰らん。かくて世々あれすたれ、永遠までもその所をすぐる者なかるべし。……

あとへんてこな動物がたくさん出てきたり、悪い草が出てきたりする。

13 その殿にはことごとく荊はえ、城にはことごとく刺草と薊とはえ、野犬のすみか駝鳥の場とならん。

豺狼、梟、蛇、鳶がここに集まるといふ。だいたい、あまり好ましくないものだ。神さまが造つたものは本当はみんな悪くはないんだけど――本当は愛でもつてみんなこれを包むことができる――イザヤ書の別なところでは、そういったものがみんな、お互いに仲良くするところがあつたでしょ。まあイザヤ書はそういったドラマチックな構造になつていて素晴らしい。17節、

17 エホバこれらのものに籤をひかせ手づから縄をもて量り、この地をわけあ



たえて永くかれらに保たしめ、世々にいたるまでここに住ましめたまわん。

エドムはいつまでも荒地となつてしまつて、審判を受けるといふ内容の、ちよつと地獄的な、エドムに対する審判の音信です。だいたい、34章というのは地獄的などころです。

● 沙漠はサフランの如く

私たちの主題となるのはもちろん35章です。これはイスラエルの復活です。ずっと前に私は訳したことがあるから、ちよつと読ませていただきましょう。昔、『聖霊の翼の陰に』というものを書いたことがある1953年だな、30年前だ。

一、曠野とかわける地とは楽しめよ！

沙漠は歛ひてサフランの如く花咲け！

二、花咲き匂いて歛べよ、

且つ歛喜ひ且つ謳歌え！

レバノンの栄光は彼女に与えられ、

カルメルとシヤロンの壮美も彼女にあらん。

彼らこそは実存主の栄光を觀、

我らの神の壮美を觀ん。

三、汝ら慕えたる手を強くし、

わななく膝を健かにせよ。

四、心たじろぐ者どもに言え、

「汝ら雄々しかれ、おそるるなかれ！

觀よ、汝らの神を！復讐は来れり。

神の報復なり！彼は来れり、汝らを救う。」

五、その時も、盲者の目はひらけ、

聾者の耳はあくべし。

六、その時も、跛者は鹿の如くに跳び走り、

啞者の舌は歛び歌わん、

然り曠野には泉水たばしり、

砂漠には川流るべし。

七、焼けたる砂地は池となり、

涸れ地は水の源となり、

野犬の伏したる巢窟は

蘆葦の境域とならん。

八、かくて彼処に大路あり、「聖き路」となえらるべし。

穢れたるはこれを過ぐる能わず、

これはただ彼の民のものなり。

この路を往く者は、おろか愚者なりとも迷うことなし。

九、かしこ彼処には獅子居らず、

猛き獣もこの路を踏まず、

凡そ此の如きは其処に見あたらず、

ただ贖われたる者のみぞ其処を往く。

ヤハウェー

一〇、ヤハウェー実存主に贖い救われし者、帰り来らん、

彼らは歎うたび謳うたいてシオンに到り、

こうべその首には永遠とこしえの歎よろこび喜あらん。

たのしみ

歎よろこび喜と歎よろこび喜とを彼らは勝ち得

かなしみ

悲哀かなしみと悲嘆なげきとは逃げ去るべし。

ということです。もうこれは本当に天国体、天国界をこんなにうるわしく叙したところはまず他にないといつていいくらい、素晴らしい、大変なところです。もうこれは幻に見ているわけです。

イザヤの預言は33章をもつて終つたし、36章から39章はその背景の歴史でありましたし、34章は今言つた地獄篇であるが、この壮麗な天国篇35章が最後にのこっている。これは第一イザヤの中では本当はないでしょう。これは第二イザヤの方に入るべきものでしょう。まあ、レンブラントやベアトールベンがこの二つの章を絵や音楽の上でなにか表しているような気がします。

エドムというのはエソウという、あのヤコブの兄弟ですけれども、「赤」という意味です。エソウがエドムで、ヤコブがイスラエル。これが妙な不倶戴天の仇みたいになって、おかしいですよ。本当は兄弟関係なんだけれどもね。宿命的になつてしまった。

●天国的な美しい姿

35章です。

―あれの荒野あれのとうるおいなき地とはたのしみ、さばく沙漠はよろこびさかて番紅さくらんの花のこと

くに咲きかがやかん。

「サフラン」というのはシャロンの広原に咲くところの植物ですけれども、この「サフラン」という訳はまあ大抵いいんでしょう。キリストが「野のユリ」と言われたのは、大体、アネモネとされていますけれども。要するに、サフランにしろ、野のユリにしろ、キリストが、「**栄華を極めたソロモンもその装いこの花の一つにも如しかなかった**」

と、神さまの栄光を一輪の花において見る。我々は、今ここに花が飾つてありますが、神の栄光の現れとして見る。

「栄光」という字は



「カーボード」

という字ですけれども、非常に重厚な内容を持った言葉です。

栄光というと、パウロのコリント前書11章に、

「神の栄光はキリストであつて、キリストの栄光は男であつて、男の栄光は女である」

という言葉があります。女性を栄光の栄光としてパウロも見ていた。ゲーテが、

「永遠の女性が我らを引き上げていく」

という句で『ファウスト』の最後を終えていますけれども、女性がいかに――ダンテにしてもそうです、ベアトリッチェに対して――栄光の最後の姿であるかということが、創造の秩序でそうなっている。女性の方の「壮美」というような言葉は「ハーダール」という言葉ですが、その言葉もここに出てきますけれども。

まあ女の方で、この信仰を持つと大変だよ、日本では女性は。十字架を負う。しかしながら、耐え忍んで、艱難にあつてもいつもニコニコして、艱難を知らないような様子のひとがある。私は、世の中で一番美しいのは女性のそういった姿だと思う。いろんなことに遇つても、抗弁はしない。全部、引き受けて、そしてすつかりそれを微笑みの中に包んでしまう。サフランと言うときに、私はそういった姿を思う。

²盛んに咲きかがやきてよろこび且よろこび且うたい、レバノンの栄^{さかえ}をえ、

カルメルおよびシヤロンの美^{うるわ}しきを得ん。

非常に天国的な美しい姿ですね。この「レバノンの栄え」がさつきのレバノンの香柏、カルメルの森、シヤロンの穀物畑、いろいろありますが、いかにも神の栄光が、豊かな栄光がこの自然界にも現れている。

かれらはエホバのさかえを見、われらの神のうるわしきを見るべし。

預言者が――エレミヤの中にも時々出てきますが――非常に美しい自然とやはりこんなに心が通じているかと思うくらいです。

³なんじら萎^{なえ}たる手をつよくし、弱りたる膝をすこやかにせよ。

この句は、あの聖歌623番「いつかは知らねど」という、いつも集会の最後に歌う歌の2節に出てくる。あの歌はまさにイザヤ書35章の歌です。それで私はあれが好きなんです。しよつちゆう大きな集会の終りにあれを歌いたくなるのは、このイザヤ書35章だからです。

〔註 「聖歌623番2節」 悩みは終りて千歳の世となり、あまねく世界は君につかえん。荒野に水湧き砂漠に花咲き、み神の栄えを仰ぎうべし。〕

⁵そのとき聾^{めしい}者の目はひらけ、聾^{みみしい}者の耳はあくことを得べし。

どうしてこんなことを預言者がはつきりと言うかと思う。そういった人たちに対する同情と、同情をもうひとつ乗り越えたところの――どうぞ、目を開かしてください、聞こえるようにしてください、立てるようにしてくださいという――祈りが預言者の中にある。そ



れを成就したのがまさにキリストではないですか。

マタイ伝11章に、

「イエス十二弟子に命じ終えてのち、町々にて教え、かつ、宣べ伝えんとて、此処を去り給えり。²ヨハネ牢舎にてキリストの御業をきき、弟子たちを遣して、³イエスに言わしむ『来るべき者は汝なるか、或は、他に待つべきか』

洗礼のヨハネまでがこんなことを言い出した。『どうしちゃったんだろう』なんてなわけだね。

⁴答えて言いたもう『ゆきて、汝らが見聞する所をヨハネに告げよ。⁵盲人は見

跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者はきき、死人は甦えらせられ、貧し

きは福音を聞かせらる。おおよそ我に躓かぬ者は幸福なり』(マタイ11・1

5)

と。ところが、一般のキリスト教はこれに躓いているよな。困ったもんだ。無教会も躓いてしまっている。そういう現象が起きると、「おかしい」と言う。何がおかしいか。だったら、キリストをおかしいと言ってもらいたい。それから、使徒行伝をおかしいと言ってもらいたい。私なんかまだとんでもない、まだまだ序の口みたいなもんだ。それを

「小池はおかしい」

なんて、何がおかしいか。

●イエスは天国体の中心

要するに、このイザヤ書35章は暗記してもいいような、歌みたいなところですよ。それで、私もあの歌(召団讃歌A3「曠野の如き」)ができてしまったんだ、34章と35章で。これは福音書が最大のこの裏付けなんです。35章を裏付けしたものはこの福音書のキリストです。そして、それを更に希望として歌っているのが黙示録の終りの方。キリストは終末の世界を現実にした人ですから。終末的現実というものはイエス・キリストが現した。

「天国は近づきたり」

というのは、

「天国は我と共に来れり^{きた}」

なんです、本当は。「近づきたり」どころの騒ぎじゃない。「天国は我と共に来れり」ということなんです。イエスは天国体の中心ですから。キリストの在るところにもう天国が輝いているんだから。片っ端から治されていく。驚くべき福音の言葉が聞かされている。それを人間が自分でもって構えて、

「これをどうかして守ろう」

なんてやっても、守れるものではありませんよ、そんなものは。何が福音かと言いたくなる、内容が恐ろしくて。ところが、

「私の中に入ってみろ。これは本当にお前に楽しくなるよ。そして、力になるよ」



と。それが福音なんだ。キリストの中に入らなかったら、キリストの言葉は絶対に受けとれません。だから、

「幸いなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

という、あの最初の言葉は、

「キリストは霊が貧しかった。自分を何ものとも思わなかった。そうしたら、天国が、神さまがキリストのものとなっていた」

ということ。

「われと父とは一つなり」

という世界。その告白であったということに、私は気がついたんです。私は真似できないから、十字架に來たわけです。

「幸いなるかな、汝、わが十字架によりて、霊が貧しくされた者よ。自分が何ものともなくなつた者よ」

と。そしたら、

「聖霊の我、天国、なんじのうちにあり」

ときたでしょ。マタイ伝5章3節は、パウロのガラテヤ書2章20節と同じこと。それをもつとキリストは、概念的な言葉でなくて、本当にじかじかの言葉で仰つた。あれが身についたら、あとはもう福音書は楽に読めるようになってしまったわけです。楽に。あの第一言は天国の力ギなんだ。はつきりと言っている註解書があったら、教えてください。私は読んだことがない。

終末的な現実、その最後の新天地はキリストが福音書においてもたらした。だから、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネを読んで、これだけを破りとして、ポケットの中に入れておきなさいよ。いつも天国の中に入れるから。それくらい少しバカにならなければダメです。私みたいに。私はこのイザヤ書はちゃんと切りとつて自分で綴じてあるんだ。

●落ち穂拾い

そういうわけで、福音書がこれの裏付けをして、これは全く福音的な内容を詩的に歌っている。それから、

4 心さわがしきもの^{むかい}に^{おそ}対ていえ、なんじら雄々しかれ懼るるなかれ、なんじらの神をみよ、刑罰きたり神の報いきたらん、神きたりてなんじらを救いたもうべし。

「雄々しかれ懼るるなかれ」なんて言つたつて、困るよ、なかなか雄々しくなれないから。

「なんじらの神、キリストを見よ。刑罰きたり神の報いきたらん」

とは、神さまはちゃんと報いてくださる。

「お前に悪い事をしたやつは、もうなにも恨むことはない」



と。神さまは、

「仇を返すは我にあり」

と、詩篇の中にもある。「復讐」とは嫌な言葉だけれども、「報いる」という意味です。善きにつけ悪しきにつけ、因果応報の世界です。霊的な因果応報があるんだから。悪い事をすれば、人をだまかしたり、恨んだり、妬んだりしていれば、自分でそれを刈り取らなくてはならなくなる。だから、なにもそれをこつちで、また恨み返すことも妬み返すこともなにも要らん。みんな神さまが善きになさるから、みんな神さまに任せてしまう。そんな汚れた渦の中に入ることはなにも要らん。それで、何を言われようと、どんな噂がたとえと、結構でざいますと。

「神の報いきたらん」

というのはそういう意味なんです。

5 そのとき聾者の目はひらけ、聾者の耳はあくことを得べし。

私の母も、50歳から88歳まで38年間失明していました。この母は一辺もこの失明をかこつたことがないから、私は本当に驚嘆した。福音の世界で救われましたけれども。私は、母の恩は言葉では言えません。私は5歳のとき父を亡くしましたから、あとは母が育ててくれた。女学校の先生をしながらね。本当に孤軍奮闘した。まあ、地上でいわゆる一番不幸なのは失明でしょうね、おそらく。私は目をつぶって、お母さんは目があかないと思って、たまらなくなったことが幾度もある。だから、五体が完全だったら、神さまのために使わないでは申し訳ない始末ですよ。

6 そのとき跛者は鹿の如くにとびはしり、啞者の舌はうたうたわん。そは荒野に水わきいで、沙漠に川ながるべければなり。

キリストは盲者の目を開き、聾者の耳を開かせ、啞者はもの言えるようにされ、跛者は立たしめ、死人を甦らせた。いや大変な人だ。これは、『無者キリスト』（小池辰雄著作集第一巻）にずっと書きました。もう、キリストを思うと、私は本当は何も言えなくなる。絶言絶慮です。

7 やけたる沙は池となり、うるおいなき地はみずの源となり、野犬のふしたるすみかは蘆葦のしげりあう所となるべし。かしこに大路あり。そのみちは聖道となえられん。穢れたるものはこれを過ぐることをあたわず。

みんな私たちは贖われて清められたから、安心して行きましよう。

ただ主の民のために備えらる。これを歩むものはおろかなりとも迷うことなし。

遺れる民、選ばれたる民。これからは落ち穂拾いしなくてはいいんですよ。そこらこらに本当に救われたい人がいるんだから。

「神さま、どうぞ、それにでつくわさせてください。それを救ってやりたいですから」



と。そういう念願で歩いていないと。

だから、隣に坐れば、「どうですか」と、ミカンをやつてから話が始まる。何か日本人はしかめつつらな顔しているものな、みんな。それはやはり喜びの音信を持つていないから。そして、ただ生活問題ばかり考えている。

あなた方は一騎当千の士ですから——もう世の中はぎりぎりです。21世紀はどうも無事に来そうもないから——本当に燃えてくださいよ。

「燃えてください」

と言つたつて、キリストの火がくれば、燃えざるをえないから。

●キリストに直結の民

9 かしこに獅おらず、あらし獣もその路^{みち}にのぼることなし。然ばそこに之にあう事なかるべし。ただ贖^{あがな}われたる者のみそこを歩まん。

これは、贖^{あがな}われないでは誰も行けないんです。お釈迦さんに救われなければ、誰も行けない。どの道でもいいですよ。とにかく、救われなければ行けない。

救いを要しない人は一人もいない。

「私は救いは要りません」

なんて、誰か言えるか。誰も言えないはずだ。ということは、万人は宗教人であるということなんです。そのことを本当に思つてないんだものな、みんな。さっきのあの有閑マダムと同じように、イザヤにやられるよ。

みな万人は救いを要する。ゆえに万人は宗教人である。

「魂がある」

ということは宗教界に属しているということ。神さま・キリストと直結の世界。あなた方は、我々は、プロテスタントにもあらず、カトリックにもあらず、キリストに直結の民であります。

「ただ贖^{あがな}われたる者のみそこを歩まん」

と。天国には、贖^{あがな}いを通して行かなければ、行けない。

「我は道なり」

という、贖^{あがな}いの道を通つていく。無道の道の道人。我々はみな道人ですから。

10 エホバに贖^{あがな}いすくわれし者うたうたいつ

いいねえ、本当にもう讃美を歌わざるをえない。もう存在そのものが讃美です。この霊歌の讃美になると、ベートーベンも、バッハも、ヘンデルもかなわない。集会の終りになつて皆さんが歌うと、声の質がちがつてくる。私なんかは、始めはボソボソと話しているけれども、あとになるほど力が出てきて困るんだ、上から力がくるから。

歸りてシオンにきたり、



ここにも「帰りて」がある。

その首にとこしえの^{よろこび}歡喜をいただき、^{かなしみ}樂しみとよろこびとをえん。而して
悲哀となげきとは逃げさるべし。

樂しみと歡びがあふれて、やりきれないんだ、本当に。悲哀と嘆きとは逃げ去ってしまう。
涙もどこかに行ってしまう。もし涙があるなら、それは喜びの涙、感激の涙がある。

この35章というのは、解説にもなりません。もうみんな、私も歌いながらしゃべっている
ようなものだよ。ただキリストの裏付けということだけははっきり言いたい。福音書が
この歌を現実にしたということです。だから、イザヤ書35章を読んだら、今度は福音書に
来て、キリストにぶつかるのが一番いい。イザヤ書35章の次は福音書なりと。

●万路一道

コロサイ書3章をちよつと見ましようか。4節、

「⁴我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らも之とともに榮光のうちに
現れん。」(コロサイ3:4)

今日の題は、最後は

「本願体現」

となったでしょ。それで結論にくるわけです。キリストは既にいらつしやつたし、また再
臨なさるけれども、キリストの福音を受けたらば、この榮光は、

「キリストの本願がお前たちに本当に恵みを与え、力を与える」

ということ。本願が与えられたら、これは体現して——「体現」はどういう意味かというと、
体現によつて神の、キリストの本質を現し、同時に体現によつて、人を同じ世界に入れる
ということ——キリストをそこに顕すと同時に、人をその同じ体現の世界に入れる。即ち、
福音の中に入れること。これがなかったら、体現の意味をなさない。

これが本当の身をもつてする伝道なんです。道を伝える——私は「宣教」という言葉は
あまり好きでない——「伝道」、道を伝える。昨日の「本願圧倒」のとおり、

「汝自身が道となれ。私がお前の道だから、道となるぞ」

ということ。無限軌道です。どこかに軌道があるのではない。無軌道なんです。そういう
のが本当の伝道です。道なき道を行く。

学問をしていれば、学問のうえで表れるし、医術をしてれば、医術のうえで表れるし、
女の方がお裁縫をしてても何をしてても、絵を書いていても、なんでもそれで表れてくる。
そして、人をその中に入れていく。音楽であろうと、することなすことはみんな。本当ですよ。
万路一道という。すべての路——あなた方一人びとりは各々の足で歩くのだから、この路
という——これは一人びとりの路は違うんだ。特殊です。それが一つの道なんです。万路
一道。人真似はいらん。



それぞれの召団はそれぞれの色を持っている。みんな色がちがう。決して全体主義ではない。それぞれの特色をもつて大いにやってください。それを大きなハーモニーにするのは、神さま・キリストがなさる。人間の工作はいらん。いわゆる全体主義になったら、組織になったら、崩れる。生命体は組織ではないから。「オルガン」(有機体)は「ジステーム」(組織)ではないから。

だから、組織神学というのは、私は嫌いなんだ。神さまの真理が組織なんかになるか。

「劇的な神学」「ドラマ・ティッシュ・テオロギ」

だ。そんなことは誰も言わないだろう。どうしてこういうことになってしまったか知らんよ。福音が本当だからしょうがない。なにも異を立てているのでも何でもない。だから、福音は躓きだといふんです。躓きの石だと。この躓きの石に依り頼む者は救われるんだから、おもしろいね、これ。イザヤ書に書いてある。

コロサイ書の3章の始めの方だつてそうさ。

「汝等もしキリストと共に甦えらせられしならば、

「もしキリストと共に甦えらせられしならば」なんて、こんなパウロの言葉は、

「お前たちは既にキリストと共に甦らせられたから」

と、こういうように読んでいかなければダメですよ。「もし」と言つたつて、

「もしでは困つたな。もしそうでない場合はどうしましょうか」

なんて、何を言っているか。

「もう甦えらせられておりますので、上にあるものを求めております」

と。私はそういうように訳そうかな、これから。新約聖書のもの凄い乱暴な訳を書こうかと思う。パウロの上をいくやつを。パウロは飲ぶよ、

「そうだ、そうだ。私は本当はそう言いたかつたんだけど、みんながダメだから、

仕方がないからそう書いた」

なんて言っているかも知れないよ、パウロは。

「何とかであらう」

なんて、口語でもつて訳されると、気が抜けてしまうよな。「であらう」は、「である」でいいんですよ。福音の世界は、「であらう」の世界ではないですから。

上にあるものを求めよ、キリスト^{かしこ}彼処に在りて神の右に坐し給うなり。²汝ら上にあるものを念い、地^{おも}に在るものを念うな、³汝らは死にたる者にして、

其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。」(コロサイ3:1-3)

素晴らしい言葉だね、これ。もう死んだもので、生命はキリストとともに神の中に隠れていると。

「地上にありながらも天界だよ」

というわけです。だから、そういう生命が体現されていれば、その周りの人たちが何かし



らんけれども、その感化を受けていくわけです。

●死人となりてなりはてて

こういう消息は、仏教の第一流の坊さんが、ちゃんとそっちの方で掴んでいるから、困るよ——困らないけれども——普通のキリスト教にはいないから、ボヤボヤしていると、仏教に負けてしまうよ。

法然の言葉に、やはり「帰る」と出ているね。

「至心の世界は至心帰命する」

という。これが放下する心の有り様なんです。自分が本当に放下してしまう。自分がなくなってしまうんです。そうすると、至心の境地は帰命となる。仏の中に帰命してしまうわけですね。これが仏法の要諦だと言っている。

「いきながら死人となりてなりはてて、おもひのままにするわざとよき」

と。大したもんだ。これがまさに本願体現の世界です。これは無難禪師の歌です。

「いきながら死人となりてなりはてて」

と、十字架されれば本当に「死人となりてなりはてて」ですよ。そうすると、本当の仏の生命が、仏の霊が、キリストの霊が来ているから。これはもう聖霊の世界だから、

「思いのままにするわざとよき」

と。これが体現されているわざになる。体現のわざになる。そのような境地でなされているわざはみんな、人を救うところの、助けるところの、力を与えるところの、わざになつてくる。

もう、「何年信仰した」とかなんとかということではない。グッと次元的にみんなそこへ入ってしまう。もう次の次元へグッと入る。

キリスト教でしょっちゅうどこでも「十字架、十字架」と言っている十字架が、

「十字架が十字架されている」

とルターが言いました。十字架が十字架されている。十字架がどうにもならない。あまりにもお題目になってしまつて、空念仏になっていると。

本当はあまり「十字架」なんて言いたくない。十字架は、胸に下げているのではなくて——胸に下げたつてわるくはないよ——けれども、そうではなくて、自分が本当にキリストと共に十字架されたら、あとにくるのは聖霊だからね。生命が来るんだから、復活の生命が。十字架されなければ、復活の生命は来ないんだ。そうでしょ。

「十字架・復活・聖霊」

と、ちゃんとその段階は踏んでいるんだ。その復活の生命は、御霊において我々は受けとるわけだ。

もうとにかく、春・夏・秋のこの大集会は非常に大事なんです——普段だつてもちろん



大事ですけども――皆さん、そうしては次元的上がっていくことです。どうぞ、人間小池なんて見なくていいから、私のこの破れ器から発するところの事態に本当にとつくんでいただきたい。

「いきながら死人となりてなりはてて、おもひのままにするわざとよき」と。楽しい歌だね、これは。

そうして、福音が本当に身について、この35章みたいに、もう贖われた者がそこを通過して、本当にこの穢土^{えど}を浄土とするようなことになる。仏教でも

「穢土即浄土」

という言葉がある。その世界に入れば、極楽は西の方にあるのではない。もうこの穢土が即浄土となる。煩惱即菩提^{ぼだい}となるというような境地です。

この言葉がすぐ躓きになるけれども、「即」という字は、次元が変わってしまうんです。この「即」というのは数学的な「イコール」ではないですよ。穢土が即浄土になる。この「即」は、次元のちがったものを受けると、即浄土になる。自分が浄土にしていくんです。

地獄則天国というけれど、あの地獄と天国のブレイクの絵があるが、さすがにブレイクは凄いよ。まあ、私は英文学だったら、ブレイクかブラウニングをやりたいね。

それで、聖書は、三人称だったら、それを一人称・二人称に直して読む。未来だったら、現在に直して読む。要求だったら、それを恩寵として読む。私はそういうギリギリの現実に来なければ、どうにもならない男なんです、魂が。それでまあ、ありがたいというわけで、皆さんにお伝えしているわけですね。皆さんも、本当に主にある友情でもって――まあこれは本当にうれしい団体ですよ――あい助け、あい祈り、あい讃美して行きましょう。

さつきから、時々、「ゲート、ゲート」と言うけれども、ゲートというやつは大きな魂でね、こういうことを言っているから、ちょっと言っておこう。

「東洋も神のものである。西洋も神のものである。北も南の地もみな神の手の中に平安に休らう」

という句がある。大きな魂だよな。その次の節に、

「万人のために義を与えようと思っている彼、唯一の義者に

「唯一の義しきもの」とはキリストのことです、

彼の百もあるところの名に

「百もあるところの名」というのは、彼はいろんな表れ方をなさったから、

このいと高き方に誉れあれ。アーメン」

という句がある。ゲートはもう無条件にキリストの前に頭を下げましたよ、無条件に。それでは、これでお話の方は一応終りにして、あとは祈りましょう。

